

平成26年度 栃木県手話通訳者養成講習会
〔通訳者養成Ⅱ〕

2014/11/15



ことばの仕組み [手話]

日本手話はどのような言語か？

市田泰弘

国立障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科主任教官

国立民族学博物館客員教授

東京大学非常勤講師

手話のしくみを考える

- ▶ 相対化して
 - ▶ 手話だけを見たり、日本語とだけ比べても、手話の本当の姿は見えてこない。
 - ▶ 「人間の脳が生み出す自然言語」という観点から見る。
 - ▶ 「認知類型論」の方法論を用いて論じる。
- ▶ 具体的に
 - ▶ 抽象論でなく、具体的な例を取り上げて論じる。
- ▶ 文法を中心に
 - ▶ 言語には「音韻、語彙、文法」という側面がある。
 - ▶ それぞれ大事だが、今回は文法を取り上げる。

取り上げる項目

1. 述語の分類
2. 動詞に組み込まれる要素
3. 他動詞/自動詞と格標示
4. 動詞連続構文
5. 内部知覚構文
6. 使役と受動
7. アスペクト
8. 否定
9. モダリティ
10. 発話行為
11. 複文
12. 節連鎖構文

述語の分類：形態的特徴

■ CL構文 (classifier construction) : 目に見える世界の表現

1. **操作/道具CL構文** : 手はヒトが操作するモノや道具。※腕はヒトの一部
2. **物体CL構文** : 手はモノ。ヒトの身体を含む。腕は何も表さない。
3. **四肢CL構文** : 手や腕はヒトの手足。
4. **拡張CL構文** : 手はモノの表面や輪郭など。動きは広がりを表す。

■ 動詞・形容詞 : 目に見えない世界の表現

5. **方向動詞** : 方向(起点と着点)を変えられる。
6. **場所動詞** : 場所のみ変えられる。
7. **身体結合動詞** : 身体に結びついていて場所を変えられない。
8. **形容詞** : 〔均質で大きな一回の動き〕 ※拡張CLから派生した形容詞のみ

述語の分類：意味的特徴

■ CL構文 (classifier construction) : 目に見える世界の表現

1. **操作/道具CL構文** : ヒトのモノに対する行為 【他動詞】
2. **物体CL構文** : モノ (モノとしてのヒトも含む) に起こる変化 【自動詞】
3. **四肢CL構文** : ヒトの身体動作 【他動詞】
4. **拡張CL構文** : モノの形 【形容詞】

■ 動詞・形容詞 : 目に見えない世界の表現

5. **方向動詞** : ヒトが (おもに) ヒトに対して行う行為 【複他動詞など】
6. **場所動詞** : モノ (モノとしてのヒトも含む) に起こる変化 【能格動詞】
7. **身体結合動詞** : ヒトの中で起こる変化 【心理動詞など】
8. **形容詞** : 属性や評価 【形容詞】

動詞に組み込まれる要素

▶ CL構文の場合：

- ▶ 手の形：対象や道具のクラス〔平たい/棒状の物体、人間、車〕
- ▶ 手の位置：知覚者と物体、物体同士の相対的な位置関係
- ▶ 手の動き：移動〔起点-経路-着点〕、移動様態、形状変化
- ▶ 上体と手の動きの同期：知覚者と物体の同一性
- ▶ 目のふるまい〔眉の位置と目の開き方〕：知覚のあり方
- ▶ 口型：行為の制御性/変化の様態
- ▶ 顎の位置：対象との距離、思慮深さ/関与のしかた

▶ 動詞の場合：

- ▶ 方向動詞の起点と着点：動作主と被動者
- ▶ 場所動詞の位置：知覚者と事象の生起場所との位置関係
- ▶ 手の動き：語彙的アスペクトとその派生
- ✓ 目のふるまい、口型、顎の位置：CL構文と同様

他動詞/自動詞と格標示 1

- ▶ 男がドアをあける vs ドアがあく
 - ▶ 動詞：同じ語幹「ak-」に使役標識「-e-」
 - ▶ 名詞句：他動詞主語と自動詞主語に同じ格標示「が」。
 - このことは決して “当たり前” ではない。
- ▶ “The man opens the door.” vs “The door opens.”
 - ▶ 動詞：同じ動詞【能格動詞】
 - ▶ 名詞句：他動詞主語と自動詞主語が同じ位置（日本語と同じ）
- ▶ 日本手話は？
 - ▶ 動詞：異なる動詞【異根動詞；補充法】
 - ▶ 名詞句：他動詞目的語と自動詞主語が同じ空間【絶対格】
 - このような格体系を【能格-絶対格型】と呼ぶ。
 - バスク語、グルジア語、ヒンディー語など。日英語は【主格-対格型】

他動詞/自動詞と格標示 2

- ▶ 日本手話：男が自転車をこわす vs 自転車がこわれる
 - ▶ 動詞：同じ動詞【場所動詞】
 - ▶ 名詞句：「自転車」は同じ空間【絶対格】
 - 自他の区別は？
- ▶ 口型：制御性/変化様態
 - ▶ 制御性：口を継続的に開けたり、閉じたりする口型
 - ▶ 変化様態：口を瞬間的に開けたり、舌を反復的に動かす口型
 - 制御系が共起すれば他動詞、様態系が共起すれば自動詞

動作主・被動者と格標示

- ▶ 操作CL構文・方向動詞：動詞の方向(起点・着点)との関係
 - ▶ 「彼が彼女を刺す」「彼が彼女に言う」
(話題化：「彼女は彼が刺す」「彼女には彼が言う」)
 - 名詞句の空間上の位置(能格-絶対格の標示)によって、動作主・被動者が特定される。語順を変えても解釈は変わらない。
- ▶ 場所動詞の他動詞
 - ▶ 「男が自転車をこわす」
 - 名詞句の空間上の位置は、事象の生起場所ではない。
 - 有生性階層にもとづく意味論的解釈〔モノはヒトをこわさない〕。
- ▶ 身体結合動詞の他動詞
 - ▶ 「彼が彼女を知っている」(話題化：「彼女は彼が知っている」)
 - 名詞句の空間上の位置は、動作主・被動者の特定には関わっておらず、基本的には語順によって解釈される〔主語⇒目的語〕。

動作主・被動者の区別

- ▶ 「ヒト対ヒト」の関係におけるあいまい性の排除
 - ▶ 視線と上体の傾き：知覚の方向の言語化
 - ▶ AUX1〔指差し〕、AUX2〔見る〕の使用 cf: 動詞連続構文
- ▶ 「ヒト対モノ」の関係における「関係の逆転」
 - ▶ CL構文の使用：「お弁当が彼を食べた」
 - ▶ モノ化する接辞の使用：「会社が人を作る」
- ▶ 参考：日本語について
 - ▶ 方向のない事象において「ヒト対ヒト」の関係にあいまい性が存在するのは手話だけではない。「彼がわかる」「彼が好きな彼女」
 - 「わかる」や「好き」のような認識や嗜好の動詞は、二重主格構文（ガ-ガ構文）をとれるため。「彼が彼女が好き」
 - モノ化する接辞：「彼のことがわかる」「彼のことが好きな彼女」

動詞連続構文 1

- ▶ 「電気をつける」
 - ▶ 「ひもをひく」+「電気がつく」
 - ヒトのモノに対する行為 + モノにおこる変化
 - 「他動詞 + 自動詞」からなる動詞連続構文〔SVC〕
- ▶ 英語との共通性
 - ▶ “I turn the light on.”
 - ヒトのモノに対する行為 + (その結果としての)モノの状態
 - 「他動詞 + 目的語 + 形容詞/前置詞句/副詞」の結果構文
- ▶ 日本語の複合動詞との関連：意味の変化、生産性の低さ
 1. “I push the door open.” vs 「#ドアを押しあける」
 2. “I pull the door open.” vs 「*ドアをひきあける」

動詞連続構文 2

▶ 動詞連続構文の定義

- ▶ 動詞と動詞の間に等位/依存といった関係を示す標識がない。
- ▶ 単一事象を表している。

▶ 動詞連続構文の種類

- ▶ 使役SVC：操作CL+物体CL 【行為と結果】
- ▶ 様態SVC：四肢CL+物体CL 【様態と経路】
- ▶ 受動SVC：〔能動+再帰〕⇒全体としては【受動】
- ▶ 再帰-他動SVC：〔再帰+他動詞〕⇒全体としては【他動詞】
- ▶ 文法化SVC：AUX1〔行く〕/AUX2〔見る〕+身体結合動詞など

非規範的構文 1

- ▶ 日本語の主格-与格交替
 - ▶ 「私が富士山を見る」vs「私に富士山が見える」
 - ▶ 「私が彼のことをわかる」vs「私に彼のことわかる」
 - ▶ 「私がそのことを思いつく」vs「私にもそんなことくらい思いつく」
- ▶ 日本語の自動-受動交替
 - ▶ 「私はそのことにがっかりした」vs「がっかりさせられた」
- ▶ シンハラ語（スリランカ）の主格-与格交替
 - ▶ 「私が忙しくする」vs「私に忙しい」（生理的状态）
 - ▶ 「私が友人を会う」vs「私に友人を会う」（偶発的事象）

非規範的構文 2

▶ 英語の中間構文

1. The door opened easily. 「ドアが簡単にあいた」
2. This car drives easily. 「このクルマは運転しやすい」
3. The book sells well. 「この本はよく売れる」

▶ フランス語の再帰動詞

1. Ce livre se vend tres bien. 「この本がそれ自身をよく売る」

▶ 英語の連辞的知覚動詞構文

1. This cake is delicious. 「このケーキはおいしい」
2. This cake tastes delicious. 「このケーキ、おいしい！」
3. This cake smells delicious. 「このケーキ、おいしそうな匂いがする」
4. This cake looks delicious. 「このケーキ、おいしそう！」

内部知覚構文 1

- ▶ 日本手話の内部知覚構文と音声言語の非規範的構文
 - 内部知覚標識：目のふるまい [眉:無標、目:開き]
 - 1. 私には富士山が見える。(受動的な知覚)
 - 2. 私には彼のことわかる。(認識の知覚)
 - 3. 私がそのことを思いつく。(想起)
 - 4. 私はそのことにがっかりさせられた。(心理の知覚)
 - 5. 私は忙しい。(生理的状態の知覚)
 - 6. 私は彼に偶然会った。(偶然の出来事の知覚)
 - 7. ドアが簡単にあいた。(行為を通じた属性の知覚)
 - 8. このケーキ、おいしい！(属性の知覚)
 - 9. このケーキ、おいしそう匂いがする。(属性の間接的な知覚)
 - 10. このケーキ、おいそう！(属性の間接的な知覚)

内部知覚構文 2

- ▶ 内部知覚としての非視覚的知覚：動作行為と知覚行為
 - 1. 聴覚：〔ことばを〕聞く ⇒ 耳をすます cf: 〔音が〕聞こえる
 - 2. 味覚：食べる ⇒ 味をみる、味がする
 - 3. 嗅覚：息を吸う ⇒ 匂いをかぐ 漂ってくる ⇒ 匂いがする
 - 4. 触覚：〔物理的に〕さわる、ふれる ⇒ 〔触覚として〕さわる
 - I. I feel my skin smooth. 「お肌がすべすべになる」
 - II. My skin feels smooth. 「お肌がすべすべ！」
- ▶ 非意志性標示としての「内部知覚＋非制御性」標示
 - 1. 車を後ろに下げる vs 車が後ろに下がる（他動詞vs自動詞）
 - 2. 台から降りる vs 台から落ちる（非能格自動詞vs非対格自動詞）
 - 3. コップを投げる vs コップを落とす（行為動詞vs結果含意動詞）

音声言語の使役

▶ 直接使役と間接使役

- ▶ 「ペンを立てる」vs「*子どもを立てる」 cf: 「子どもを立たせる」
- ▶ 随伴使役: “I stand the child.” ⇒直訳「子どもを立てる」
 - 英語の非能格自動詞は潜在的に他動詞 “I stand myself.”
 - 随伴性: 自分自身の身体の延長として他者の身体をとらえる。

▶ 使役者と被使役者それぞれのコントロールの度合い

- ▶ 「子どもを立たせる」vs「子どもに立たせる」
- ▶ “I make/have the child stand.”

▶ 「真の使役」(強制/説得/依頼)と「容認の使役」(放任/許可)

- ▶ 「{立ちたくない/立っている/立ちたがっている}子どもを/に立たせる」
- ▶ “I let the child stand.” “I leave the child to stand.”

日本手話の「真の使役」

■二つの引用節を含む節連鎖の文法化

[①使役言語行為の引用節＞(②発見標識)＞③被使役者の認識の引用節＞④結果事象を述べる節]

① 使役言語行為の引用節：強制の度合い

➤ 強制、説得、要請、指示、助言、提案、依頼、誘い、伺い、義務、願望、嘆き

② 「使役言語行為の“発見”」の非手指標識（目のふるまいと頭の動き）

I. 使役者の強制の度合いが高い場合：「予想外」という意味合い

II. 使役者の強制の度合いが低い場合：「察する」という意味合い

cf: ①+② 発見標識が共起した「察せられた使役言語行為」の引用節

③ 「被使役者の認識」の引用節⇒文法化：間接使役標識

I. 被使役者のコントロールの保持の度合いが低い：「わかる」

II. 被使役者のコントロールの保持の度合いが高い：「かまわない」

④ 結果事象（＝被使役者の行為）を述べる節

日本手話の「容認の使役」

■ 間接使役構文（真の使役）〈再掲〉

[①使役言語行為の引用節＞(②発見標識)＞③被使役者の認識の引用節＞④結果事象を述べる節]

■ 間接使役構文（容認の使役）

[①被使役者の許可の申し出の引用節＞(②発見標識)＞③使役者の認識の引用節＞④結果事象を述べる節]

1. 被使役者の行為を「眼前事態描写の独白」の形で述べた、発見標識が共起した引用節（①+②）を用いることで、「放任」の意味を表す。
2. ③は「かまわない」のみ。
3. ③の引用節は、真の使役では被使役者の認識であるのに対して、容認の使役では使役者の認識である。しかし、形式的には両者はまったく同じ形をしている。

受動 1

- ▶ 日本手話の方略①：目にみえる世界の表現
 - ▶ 動詞の方向を逆転することにより、「知覚者が被動者であること」を表す。
 - ▶ 操作/道具CL構文（目に見える世界の他動詞）では第一義的に腕は動作主のものであり、「被動者は動作主でもある」と解釈される。すなわち、動詞の形態としては再帰形である。
 - ▶ 再帰形の受動構文化：「知覚者が動作主ではないこと」を示すには以下の方略が用いられる（すべてを同時に共起することも可能）。
 - a. 上体の動き・姿勢：腕の動作と身体の非同一性を示す。
 - b. 目のふるまいによる内部知覚標識：予想外の変化を知覚したことを示す。
 - c. 口型による制御性の標示：知覚者によるコントロールがないことを示す。
 - d. 視線：任意の場所に視線を向けることで動作主の存在を示唆する。
 - ▶ 受動動詞連続構文：同一語幹の〔能動形＋再帰形〕による動詞連続構文。動詞連続という形式が単一事象解釈を強要するため、被動者以外の動作主の存在が示唆される。

受動 2

▶ 日本手話の方略②：目にみえない世界の表現

- ▶ 動詞の方向を逆転することにより、「知覚者が被動者であること」を表す。
- ▶ CL構文と異なり、再帰形としての解釈は生じない。
- ▶ 知覚者の人称制限：有生性階層
 - a. 事象の参与者に一人称が含まれる場合は、一人称は必ず知覚者として扱われなければならない。
 - b. よって一人称が被動者であれば動詞の方向はつねに逆転しなければならない。
 - c. その結果、「彼が私に言った」と「私が彼に言われた」は同一形態となる。
 - 動作が三人称から一人称に向かう時、動詞は常に逆転形が用いられる。
 - 動詞の形態は有生性階層にもとづいている。⇒「逆行態(inverse voice)」
- ▶ 逆行態を受動化するための方略：文末の接語代名詞が被動者に一致。
 - 文末の接語代名詞は「話題」を示す⇒「被動者の話題化」

受動 3 : 日本語の逆行態

- ▶ 日本語にも逆行態があるとする主張がある。(shibatani 2003)
 1. 「私が彼にあげる/*くれる」vs「彼が私に*あげる/くれる」
 2. 「私が彼を助けてあげる/*くれる」vs「彼が私を助けて*あげる/くれる」
 - 「くれる」は逆行形。
 - 三人称から一人称に動作が向かう時にはつねに逆行形が用いられる。
 3. 「私が彼に電話をかける/*かけてくる」vs「彼が私に電話を*かける/かけてくる」
 - 「-てくる」も逆行形。

アスペクト（相） 1

▶ 語彙的アスペクト：動詞が表す事象に内在する時間的特徴

● 日本語の語彙的アスペクト（金田一1950）

1. 状態動詞：「ている」がつけられない。「ある/*あっている」
2. 継続動詞：「ている」をつけると【進行】。「食べる/食べている」
3. 瞬間動詞：「ている」をつけると【結果残存】。「死ぬ/死んでいる」
4. 特別な動詞：「ている」をつけても意味が変わらない。「そびえる/そびえている」

● 日本手話の語彙的アスペクト：形態〔手の動き〕に反映している。

1. 無回性動詞〔小さな一回の動き〕：いる、待つ、見る
2. 多回性動詞〔小さな複数回の動き〕：食べる、書く、作る
3. 一回性動詞〔大きな一回の動き〕：
 - a. 始点型：言う、忘れる、生まれる
 - b. 終点型：死ぬ、覚える、決める
 - c. 漸進型：変わる、成長する

アスペクト（相） 2

▶ 派生の形態と意味

● 拡張派生の形態と意味

1. 無回性動詞：持続 > 進行
2. 多回性動詞：反復延長 > 進行
3. 一回性動詞：運動短縮＋終点保持 > 結果
 - 他のアスペクト形式（助動詞：進行の〔中〕や完了の〔終わる〕）との差異は、「観察可能」「生々しさ」にある。

● 緩徐派生の意味

- 手の運動を遅くし、内部知覚標識と特定の顎の位置〔前〕を共起すると「将然（～しようとする、～しつつある）」になる。

✓ 口型のテンス/アスペクト的意味

1. 制御系：r-mm>未来、t-mm/oo>現在、aa>過去
2. 変化様態系：pa>完了、po>出現

否定

- ▶ 日本手話では、基本語や助動詞の多くに否定補充形がある。
 - ▶ わかる/わからない、同じ/違う、必要/不要、できる/できない…
 - これらはたいてい否定辞の付加ができない。「*わかる-ない」
- ▶ 日本手話には否定辞が複数存在する。
 - ▶ ない〔存在の否定〕、しない〔意志の否定〕、まだ〔完結の否定〕
 - アスペクトの助動詞の否定補充形が混在するため。
 - 中国語にも複数の否定辞があり、「不 bu」と「没 mei」の使い分けはアスペクトに関連している。

モダリティ、ムード（法）

▶ モダリティは意味、ムードは形式をさす。

（参考：palmar 2001）

モダリティの種類		絶対的 ←	→ 相対的
根源的 (非現実)	内在的	意志・不能 (する/しない/できない)	能力 (することもできるし、しないこともできる)
	拘束的	義務・禁止 (しなければならない/してはならない)	許可 (してもいいし、しなくてもいい)
認識的 (現実)	認識的	蓋然性 (そうである/ないにちがいない)	可能性 (そうであるかもしれないし、そうでないかもしれない)
	証拠性	直接知覚 (そうである/ないという証拠をもっている)	間接知覚 (そうである/ないという間接的な証拠をもっている)

- 絶対的と相対的の間は連続体であり、中間にはさまざまな度合いが想定される。〔意志〕と〔能力〕の間に「したい」「願望」が、〔蓋然性〕と〔可能性〕の間に「だろう」「推量」があると考える。
- 英語には「法助動詞」がある（証拠性は知覚動詞が担う）。隣接する領域にまたがるものが多い（mustは義務～蓋然性、mayは許可～可能性、canの能力～許可～可能性にまたがっている。また、willは意志と蓋然性を担う）。
- 日本手話には英語同様「法助動詞」がある（証拠性は目のふるまいが担う）。また、「規則」から文法化した助動詞が「べき〔義務〕」と「ちがいない〔蓋然性〕」にまたがる用法をもつ。

発話行為 1

- ▶ その発話が行為として果たす機能
 - ▶ 平叙：情報の提供
 - ▶ 疑問：情報の要求（yes/no疑問、wh疑問）
 - ▶ 命令：行為の要求（強制、指示、依頼、勧誘…）
 - 伝達モダリティあるいは発話モダリティとも呼ばれる。
 - 「間接発話行為」：ある機能が他の機能をもつ形式で表されること。「しませんか」は形式は〔疑問〕だが、機能は〔命令:勧誘〕。
 - 「遂行文」：その発話が発話で示された内容の行為そのものである場合：「約束します」「命じます」
- ▶ 発話行為の言語化
 - ▶ 英語は倒置（語順の組み換え）や省略によって表す。
 - ▶ 日本語は終助詞「か、よ、ね、な」によって表す。
 - 日本手話は頭の動きと顎の位置、眉の位置によって表す。

発話行為 2

▶ 日本手話の文末および間投表現の頭の動きと発話行為

頭の動き	大きさ	発話行為の種類	
移動	+	Yes-No疑問〔眉有標〕	間投表現（想起・発見）
	－	平叙 【無標】	間投表現（想起・内的検索・更新）
首ふり	+	感嘆	平叙/間投表現（存在否定）
	－	WH疑問 〔眉有標〕	平叙/間投表現（存在以外の否定）
頷き	+	Yes-No疑問 〔眉有標〕	平叙/間投表現（肯定）
	－	同意要求〔眉有標〕	平叙/間投表現（同意）
顎上げ	+	命令	間投表現（共感）
	－	命令 〔眉有標〕	平叙/間投表現（断定）

- **太字**は発話行為の言語化の典型例
- 首ふりと頷きは複合することができる⇒〔否定疑問〕。ただし、日本語には否定疑問を用いた間接発話行為が多いが日本手話にはほとんど見られない（「～しませんか〔勧誘〕」「～してくれませんか〔依頼〕」など）。
- 〔想起、発見、内的検索、更新〕は、顎の位置が順に〔上、前、下、後〕である。

発話行為 3

29

▶ 日本手話の命令文〔顎上げ〕における顎の位置と眉の位置

顎の位置 \ 眉の位置	上：文脈契機 使役者の制御 [-]	下：話者契機 使役者の制御 [+]
上：思慮性 [-] ⇒被使役者の制御 [-]	指示 have	強制 make
下：思慮性 [+] ⇒被使役者の制御 [+]	助言	説得 get
前：関与性 [+]	提案	要請 ask
後：非関与性 [+]	無責任な提案	押しつけ force

- ▶ **太字**は命令に相当するもの。使役者のコントロールがあるか、被使役者のコントロールがない場合。
- ▶ 下欄の英語は、間接使役引用節連鎖構文に使役言語行為として含まれた場合に相当する英語使役動詞の種類。

複文 1

- ▶ 複文：文と文をつなげたり、文に文を埋め込んだりしたもの
 - ▶ 従属節：主節を修飾する節
 - ▶ 補文節：主節の主語や目的語の位置に埋め込まれる節
 - ▶ 関係節：名詞を修飾する節
- ▶ 日本語：
 - ▶ 従属節：理由節「～する/したから/ので」、条件節「～したら/すれば/すると」など
 - ▶ 補文節：「～するのを見た」「～するの/ことを知っている」
 - ▶ 関係節：「～する/した○○」【標識なし】
- ▶ 日本手話：
 - ▶ もっとも基本的な標識は2種類の頭の動き
 - 〔移動〕が「切る」、〔頷き〕が「つなげる」という機能をもつ。

複文 2

31

▶ 従属節

- ▶ 接続部の〔頷き〕：つなぐ〔独立性が高い〕：時間節⇒理由節
- ▶ 節末の〔移動〕：切る〔独立性が低い〕：条件節

頭	頷き		移動
顎	時間節	理由節	条件節
上	始まってしばらくして	～だから 〔客観的〕	～すれば 〔恒常的〕
下	終わったあとに	～なので 〔主観的〕	～したら 〔個別的〕
前	まさにその時に	まさにそういう理由で 〔理由焦点〕	(もしも) ～すると 〔条件焦点〕
後	終わってすぐに	そのためにそうなる 〔帰結焦点〕	そうするとそうなる 〔帰結焦点〕

複文 3

- ▶ 補文節：〔移動〕：切る〔独立性が低い〕
- ▶ 関係節：
 - ▶ 日本手話の関係節は主要部内在型関係節が基本。
 - ▶ 日本語にも主要部内在型関係節は存在する：
「走ってくる子どもを抱きとめる」vs「子どもが走ってくるのを抱きとめる」
 - ▶ 補文節と同じ形式で、解釈が異なるだけ。日本語も同様。
 - ▶ 「子どもが走ってくるのを抱きとめる」vs「子どもが走ってくるのを見る」
 - ▶ 〔名詞-形容詞〕語順も、形容詞を述語とする関係節であるとみなすことができる。
 - ▶ 節レベルの標識はつかず、形容詞に伴う副詞的標識が節末の標識を兼ねる。
 - ▶ 日本語にもやや変則的だが存在する：
「おいしいお弁当を買う」vs「お弁当のおいしいのを買う」

節連鎖構文

- ▶ 間接使役構文以外にも文法化した節連鎖構文がある。
 - ▶ 発見構文：予想外の新情報。受益・被害の意味も。
 - ▶ 「～したら（あっというまに）～だ」「～してくれた」「～られた」など
 - ▶ 想起構文：新情報をもとにした想起。
 - ▶ 「～して～実感した」「～して～しようと思った」など
 - ▶ 譲歩構文：一般的な予測からの逸脱、過去の知識に修正を迫る新情報など。
 - ▶ 「～なのに～だ」「～だったのに、いまは～だ」など
- 節連鎖構文が複雑に重なり合って談話が構成されることが多い。